



私と同じ、二十五年間現役。

六千本の社員です。

「もうかるみかん作り」
河内町 西山勇毅さん

秋の深まりとともに、河内町を中心とした金峰山一帯は、緑とみかん色のコントラストが鮮やかです。その中で一際目をひくのが、西山勇毅さん(53)の畑。隅々まで車が入っていない道があり、囲いを高さ三メートル程の防風林がグルリと取り囲む姿は、遠くから見るとまるで城砦のようです。西山さんのみかんは、皆に守られ、毎年、表裏の別なくたわわに実をつけます。



昭和二十八年。十九歳の若さで百三十アールのみかん畑と共に経営権を委譲された西山さんは、二十二歳で一念発起。もうかるみかん作り」を目指し、その実現のためにいくつかのプランを立てました。

- 一、経営規模の拡大と集中化
- 一、基盤整備
- 一、優良品種の改良

「頭を使い、身体を使い、金を使う。」をモットーに、三十五年には、灌木の林だった金峰山周辺を購入。また、これからは自動車の時代だ」と読み、三年かけて、道路が縦横に走る三ヘクタールのみかん畑を開墾し、植林。

徹底した樹体管理を行いました。現在では、四ヘクタールの畑に六千本のみかん。

「私は六千人の社員をかかえた社長のようなもの。頑張ってるにも関わらずなりませんか、社員の健康には常に気を使っています。」

という言葉とおり、畑には一本の雑草もありません。いつも肥料が木に充分行き渡るように畑をかき混ぜているからです。

「農業は自然が相手。常に心に余裕がないといざというとき対処が出来ない。子供が何も言わず黙って跡を継げるようなみかんづくりを目標にやってきました。といっても、何も特別なことをしてきた訳じゃありません。ただ自分なりにやってきただけ。でも、その自分でやる」という姿勢が大事だと思いますね。今の農家はちよつと他力本願的なところがあるような気がします。」

と、語る西山さんは今、息子さんへのバトンタッチのための計画を着々と進行中。みかんの木の植え替えもその一つ。基盤整備がバツチリなので、畑の隅々までトラックやパワーシヨベルが入り作業は順調です。

「私と同じで、二十五年間現役で働いてきた社員も、停年を迎える時期が来たのですよ。」と語る西山さんの目が、常に人の一歩先を見つめてきたというその確かな目がフツと優しく揺れました。視線の先には、作業に余念のない息子さん。

今、みかん山は収穫のまっ最中です。